

原田千晶(ハラダ チアキ)

平成20年度2次隊 村落開発普及員 パラグアイ

## パラグアイの気候や文化の紹介

南アメリカ中南部、亜熱帯地域に位置するパラグアイ共和国で2008年9月30日から、村落開発普及員として活動している。1811年、スペイン領から独立。住民の大半はメスティーソで、言語はスペイン語とグアラニー語を話す。テレレ(冷たいお茶)やマテ茶(温かいお茶)を毎日飲む習慣がある。牛肉の個々消費量が世界一だけに、肉を毎日食す。しかし野菜を摂取しない方がとても多く見受けられる。アルパという楽器を使った伝統的な音楽はとても素敵で、必ず結婚式や15歳を祝うパーティーではこの音楽でダンスをする。南米大陸の中では少し陽気さに欠けるところもあるが、親切な人々が多い。そして72年前に日本から移民した日系人の活躍が、この国でとても評価されている。



丘の上から見える夕日(任地)

## 活動や生活について

任地は、パラグアリ県・サブカイ市、首都アスンシオンから80kmの所に位置する。人口は約6,000人、18の地区で構成されている。1800年代初期、イギリス人がこの街に入り長年にわたって鉄道を立ち上げた。これが南米大陸で初の試みだった。2000年には鉄道の需要がなくなり、それ以降栄えていた街も活気がなく廃れていく一方である。街から徒歩40分、丘を上った所に配属先「NGO チルカポトゥ養蜂組合」がある。組合は、組合長・副組合長・書記・経理・その他メンバーで構成され、全ての組合員が副業で仕事をし、蜂蜜収穫で収入がられるよう週1回養蜂場で働く。2005年、JICAの養蜂プロジェクトで立ちあがり現在に至るが、未だ組織的にあまり機能せず、蜂蜜の収穫すらできていない。そこには幾つかの問題がある。第一に、蜜源が少ない事。第二に、養蜂場が丘の上であり蜂にかなりの労力がかかり、冬には蜂に不向きな南風が吹く事。第三に、組合員の養蜂技術がままならないこと。悪条件の立地を変えることは容易ではないが、蜜敵を少しでも増やすために植林をしたり、少しでも良い条件の場所を的確に選んだりする事は可能である。組合の運営を強化することもさることながら、収入源となる蜂蜜の収穫が出来ていないことが最大の問題である。そこで彼らの養蜂技術向上と組合運営・組織化を並行して行い、収穫時期である4月ごろまでに全体の基盤を固め来年度に向けてのビジョンを立て、彼らとともに活動していくことが重要である。



通勤時、二頭の牛が喧嘩、それとも愛を示しているのか？

現在、月1,2回会議を行い、今後の運営や養蜂技術について話し合う。じっくり彼らと話し合い、ビジョンを持って活動に取り組みたいと思っている次第である。

この村の人々は主に現地語・グアラニー語を話す。自給自足で生活を営み、男性は農業、女性は家事を主にしている。農業で抱える問題は農業用水がない事である。雨が降らなければ作物が育たず収入減となる。

2009年、1月からサブカイ市全体を活性化させる新しいプロジェクトに取り組んでいる。

貧困な地域だけに出稼ぎする人が多く、街で働く人は少ない。そこで鉄道を題材とした「観光プロジェクト」を、立ち上げた。街を甦らせる可能性を大いに秘めている。

鉄道博物館・イギリス村の修復、プロジェクト運営に必要な組織について、現在、定期的に市役所でプロジェクト会議を行っている。

一人でも多くの人が生活生計を向上し、喜ぶ笑顔を見れる日が待ち遠しい。



自宅のママ、改良カマドが導入され誇らしげの顔をしている。

#### プロジェクト資源

鉄道博物館 + 鉄鋼場

イギリス村

チャコ戦争時に捕虜されていたボリビア人が作った石畳の道  
パラグアイで初めて掛けられた橋

イギリス人が作ったお墓

年内に国道が開通する予定(現在工事中)

丘の上から一望できる素晴らしい景色